

● 目次

- ： 雑感，体芸図書館
- 4 利用者の声
- 4 私の一冊
- 6 国際交流コーナー・地域情報コーナーを知っていますか？
- 7 Ask Us としょかんミニガイド
- 8 本学教官寄贈著書紹介
- 9 とびっくす
- 10 掲示板

雑感，体芸図書館

阿部 生雄

自分の専門以外のことを書くということは勇気を要するものだ。私生活の吐露ならまだしも（この方が勇気があるかもしれないが），大学図書館の広報紙に何か図書館に関することを書くとなると，少々どころか大いなる覚悟がある。図書館については全くの素人だし，今まで，一利用者としてしか図書館を捉えてこなかったからである。たまさか図書館運営委員，蔵書構成委員等に任命されても，常に，一利用者として，図書館の機能や構造を考えてきた。しかし，先号の『つくばね』（vol.24, no.2）で，医学系の高田彰先生は，きわめて野心的な医学図書館の将来展望を披瀝された。しかし，自分の領域，つまり体育・スポーツ科学で，体芸図書館に一体どのような将来展望があり得るのかを自問して慄然とした。その将来的な姿を展望できない自分に気がついたからである。付け焼き刃で体育科学系にとっての体芸図書館の将来図を描いても仕様のないことであるが，この際全く個人的に，体育科学系の一利用者にとって「都合のよい」体芸図書館とはどういうものなのかを夢想してみるのも一興と考えてみた。

体芸図書館には，日本で最初の体育指導者養成機関であった体操伝習所時代（明治11年設立）から東京教育大学体育学部時代に至るまでの，体育・スポーツ関係の本が所蔵されている。この本の蓄積こそが，わが国の体育学の足跡そのものを示している。体育・

芸術図書館（体芸図書館）が開設されたのは1974年7月1日のことである。医学図書館の開設（1978年1月5日）と中央図書館の開設（1979年10月1日）に至るまで，体芸図書館は筑波大学で唯一の図書館として機能していた。このことは，いわば「旧」中央図書館が体芸図書館として譲渡された，とみることもできる。つまり，「新」中央図書館が新設されてはじめて，体芸図書館は独自の機能を獲得したともいえるからである。聞き及ぶところでは，全国の総合大学で，体育と芸術のための図書館をもっている大学は筑波大学を除いて存在しないという。全国の体育や美術の専門大学には，図書館，時として美術館を擁する大学も存在しよう。しかし，筑波大学のように中央図書館，体芸図書館，医学図書館という三つの図書館が専門性を維持し，有機的に結合している例はめずらしいという。こうした筑波大学固有のシステムを何とかして最大限に生かしたいものである。

筑波大学に1985年に赴任して，愕然としたのは，体育・スポーツ関係図書の購入状況であった。その頃に出版されていた本があまり整備されていないので，体芸図書館の主任専門職員の方に体育科学系の図書購入状況と，併せて日本体育大学の図書購入状況を調査してもらったことがある。目を覆わんばかりの調査結果であった。一概に購入冊数が少ないか

ら悪いとは言えないが、1984年度は732冊（和書339冊，洋書393冊），1985年（11月まで）は558冊（和書289冊，洋書269冊）であった。開設年度から1985年度における図書購入冊数の平均は、533冊であった。一方、日本体育大学では、1983年には10,090冊（和書4,520冊 洋書5,570冊），1984年には9,185冊（和書5,712冊 洋書3,473冊）で、1975年から10年間の図書購入冊数の平均は、約8,300冊であった。日本体育大学では、体育・スポーツ関係以外の本も購入しなければならないから、この数値の解釈には幅があるが、それは筑波大学の体育科学系が購入した図書の約15倍であった。この傾向には、当時あまり慣れていない図書の「中央管理システム」の影響もあったように思う。自分の研究費で購入した図書の専有的利用というシステムに慣れてきた者にとって、専有冊数の制限は、図書購入の意欲を殺ぐ場合があったからである。このデータを当時の学群長であった金子明友先生（現在の日本女子体育大学学長）に示し、何らかの善処を検討するように働きかけた。その結果、学系予算の5%と、各教官の研究費の一部を拠出してもらい、年間約500万円に及ぶ学系共通図書費を設ける制度が実現した。現在、日本体育大学の図書予算は、1億円を越えると聞き及ぶ。この額は、「対抗する」という次元を超えており、われわれが考えるべきことは、厳しい予算枠の中で体育・スポーツ科学の特色ある図書構成をしつつ、他の同類の図書館と有機的、補完的、互惠的なネットワークを構築する点にあると思う。

体育やスポーツは、日本十進分類法（NDC）でいうとスポーツ・体育（780）と諸芸・娯楽（790）にまたがって分類される小さな領域である。これに対して、芸術は、芸術・美術（700）、彫刻（710）、絵画（720）、版画（730）、写真（740）、工芸（750）、音楽（760）、演劇（770）に分類される。必ずしもNDCの分類がその学問領域の専門分化を反映しているとはいえないが、こうしてみると、芸術は、体育・スポーツの分野よりも細分化されて分類されているといえよう。しかし、体育・スポーツの研究領域は、ほとんど全学問

領域にまたがっているといても過言ではない。ちなみに、体育科学系は、体育学、運動学、体力学、健康学の4つの研究分野で構成されており、体育学分野には体育哲学、体育史、スポーツ人類学、体育社会学、レジャー論、体育経営学、体育心理学、体育科教育学、特殊体育学、武道論といった研究領域がある。運動学分野には運動学、トレーニング学、体操、体操競技、陸上競技、水泳、バレーボール、サッカー、バスケットボール、ラグビー、ハンドボール、野球、卓球、バドミントン、テニス、剣道、柔道、弓道、舞踊、野外運動がある。また健康学分野には、応用解剖学、健康生理学、保健環境学、健康管理学、学校保健学、栄養学、スポーツ医学を研究する領域がある。体力学分野は、運動生理学、運動生化学、運動力学、体力学、測定評価学の領域から構成されている。これでも更なる専門分化と多様なスポーツ種目に対応できない。こうした多岐にわたる領域の図書や雑誌を網羅的、かつ完全にカバーすることは困難なことである。しかし、それぞれの研究領域で、意識的に図書の充実を図ることがなければ、体芸図書館の最も根本的な機能を維持することは出来ない。図書の充実、これは図書館の王道であることを忘れてはならないだろう。

その一方で、筑波大学が先駆的に取り組んでいる電子図書館の充実を図る必要がある。現在、図書や資料の検索、それらの所在の確認、といった側面にとどまらず、研究内容の入手にとって、電子図書館はきわめて重要になってきている。博士論文への接近、雑誌、アカデミック・ジャーナルや紀要等の掲載論文は、インターネットを通じて迅速に入手可能となり始めている。また、研究上の様々な情報がネットワークを通じて入手可能となっていることから、筑波研究学園都市の研究機関は勿論のこと、国内、国際における関連研究機関のインターネット情報、ホームアドレス等を利用者に提供する必要がある。スポーツの領域にひきつけて言えば、例えば、ドイツのケルン体育大学図書館とそのスポーツ・ミュージアム、スイスのローザンヌにあるIOCのオリンピック・ミュージアム、カナダのウエスタン・オンタリオ大学にある国際オリ

ピック研究センター等には、情報量に満ちたホームページがある。

しかし、インターネットによるネットワークの真の充実、ホームページの充実、なかんずく、情報の開示と提供にある。この意味で、体芸図書館の独自性は、固有のホームページを持ち、体育・スポーツと芸術に関する研究成果と個性ある作品やメッセージをいかに集約的、恒常的に発信できるかにかかっている。イギリスのスポーツ史学会のホームページはインターネットアクティヴである。例えば、そのホームページにアクセスした者が紹介したい論文を書き入れることが可能で、文献リストが補完されつつ、全ての者によって構築されていく。もし、体芸図書館に体育科学系と芸術学系との双方向的で集約的なホームページが構築されれば、図書館と研究室との価値あるネットワークが形成されると思う。体育科学系と芸術学系の先生方の日常的な研究活動の中から、世界に向けた学術的情報の構築と発信がなされることが望ましいのである。その日常性の将来に、筑波大学における体育、スポーツ、芸術の総合的なデータバンクが展望できる。

体芸図書館の基本は、あくまで、関連図書の収集を主に目的とする図書館でなければならないが、体育・スポーツは演技的、技能的要素をもつことから、映像資料の体系的収集が重要となる。また芸術学系では、日々制作されてくる作品そのものが、収集の対象となり得る。絵画、彫像、書画、デザイン、写真、ビデオ、映画等の他にも、スポーツの領域でいえば、表彰関連資料、大会関連パンフレット、スポーツ用具等が、体芸図書館の収集すべき重要な対象となる。また、体育、スポーツ、芸術の領域で活躍された当大学に関連の深い人々の記念物、作品等の収集も重要な課題となろう。「図書館」が「ミュージアム」に接近することになる。芸術とスポーツは、「見せる」ということを重要な要素とするため、両分野の統合を図ろうとする体芸図書館は、この「ミュージアム」的機能を重視しなければならない。「ミュージアム」機能の軽視は、体芸図書館の固有性の喪失につながりかねない。将来、芸術学系で大学美術館を展望することもあろう。しかし、その実現の途上

にあつて、体芸図書館における「ミュージアム」化は、辿らなければならない道筋である。

従来、体芸図書館は、芸術的な作品の展示やテーマ別の展示を企画してこなかった。この点、1998年9月7日から10月16日まで、教育学系と附属図書館の共催特別展『近代教育学の源流～コメニウスからフレーベルまで～』は重要な先例となる。体育科学系、芸術学系がそれぞれの、あるいは共通のテーマを設け、附属図書館（体芸図書館）と協同で、展示を試みるということがあってよい。いや、むしろそのような企画こそ体芸図書館の存在意義を示すものと考えられる。「スポーツと芸術」、「近代オリンピックと芸術種目」、「スポーツと肉体美」、「スポーツと映像」等々、多くの魅力的な共同テーマが待ち受けている。規模は小さくとも、個性ある展示が体芸図書館に実現されれば、そのパンフレットや電子化された情報は、筑波大学の学生や教官を越えて、広く世界を駆け巡る。より魅力的な体芸図書館が作られることになる。その実現のためには、3年毎に部署を移動するライブラリアンも必要であるが、体育・スポーツと、芸術の分野に取り組む、「学芸員」のような専門的なライブラリアンの養成を考えてゆく必要がある。

筑波研究学園都市は、ある意味で、フランシス・ベーコンが夢想した『ニュー・アトランティス』に出てくるベンセレム島に似ている。その島にある「ソロモン館」は、筑波研究学園都市の研究所や筑波大学に似ている。多くの研究者の集まるこの館は、科学技術を中核に据えたユートピアである。世界の人々に知られていない島国を想定したこの未完のユートピア論では、十数人の研究者が世界各国をめぐって、最先端の知識を十余年かけて収集する。今日で言えばインターネットによる情報の収集というところである。しかし、高度な知識を取り入れ、誰も知らない島国で最先端の技術を発達させても、それを世界に還元することはない。いわば閉ざされた科学ユートピアである。筑波研究学園都市のソロモン館たる筑波大学は、最先端の科学と学問・文化を発信する開かれたユートピアを目指したいものである。

(あべ・いくお 体育科学系教授)



利用者の声

宮野 桂輔

私は今、体芸図書館の膨大な情報に接する機会に恵まれたことを最大限に活用する方法を模索中ですが、未だこれといった答はありません。

現在は本学大学院で建築設計を専攻する者ですが、学群を卒業後、しばらく設計事務所に勤務していました。社会に出て初めて気付くのですが、何か必要な情報を得たいという時にいざ周囲を見回しても、意外と適当な情報源がないということです。実際に何度か体芸図書館があれば、と思いました。(もっとも、十分に時間がとれないのも事実ですが。)

体芸図書館に所蔵されている本は、特に芸術系の本に限っていえば、それらを自由に利用できるということは、かなり便利なことです。一般にこの分野の本は、図版が多かったり、装幀が立派だったり、発行部数が少なかったりで高価なものが多いのが現実です。そのくせ本、月刊誌ともにたくさんの種類があって、たとえ厳選したとしても書籍代は膨らむ一方です。また過去の出版物、特に雑誌のバックナンバーは昔のものほど探す

のが困難ですし、全集ものは古本屋では縛られていてなかなか見せてはもらえません。ましてや海外の雑誌などはそれなりの本屋に行っても無いものがあり、これらの資料に収集の苦勞をすることなく自由に触れられるのはまさに絶好の機会です。おそらく大学を離れてしまうと、滅多に無いことと想像します。まずそんな時間が無くなるからです。

さらに、夜10時まで開館しているのも大きな魅力です。最近では祝日も開館するようになり、さらに便利になりました。おかげでほぼ1日調べものに没頭することができます。

建築学科のある、某有名大学の図書館に入ったことがあります。その貧弱さには同情しましたが、実際に外部の人にとって、体芸図書館の充実ぶりは羨望的的です。私自身、一度外部の人間になってはじめてその価値に気付きました。再び学生となった今、足繁く図書館に通う日々です。

(みやの・けいすけ 芸術研究科2年)



私の一冊

卯城 祐司

「第二言語習得の研究」

レスリー・M・ビービ著／卯城祐司、佐久間康之訳 (大修館書店 1998) [中央図：807-B32]



言語を習得する最善の方法とは何か? 恐らく誰もが、目標言語に多く接すること、つまりは数多くのインプットを与えれば良いと考えるであろう。確かにこのことは一理ある。が、しかし、最善とは言えないことも確かである。現に日本の英語教育の現場では、数多くの歳月を費やして試行錯誤を繰り返しながら、めざましい成果をあげていないのが現状である。

本書は、一見かけ離れた分野を含む理論的な研究成果が、いかに実践に密接に関連しているのか、すなわち「理論と実践の統合」を強く説いている。原著は、5つの分野の第一人者がそれぞれ、「言語習得という複雑な宇宙」のメカニズムを巧



みに説き明かしており、国内外の大学院・学部等で必読とされている入門書かつ専門書である。

具体的には各章が、1) 心理言語学的視点、2) 社会言語学的視点、3) 神経言語学的視点、4) 教室における研究の視点、5) バイリンガル教育の視点、という5つの異なる専門領域から、第二言語習得研究の成果を吟味している。まとめの第6章では、走り高跳びの進歩を例にとり、理論と実践の関係が述べられている。水平速度、垂直方向へのエネルギーの変換、重心の移動や遠心力などの物理学の理論は、直接的には何ら示唆を与えないが、これらの洞察によって競技は着実に向上してきた。英語教育に置き換えるならば、跳躍者である学習者は、これらの理論を知る必要はない。しかしコーチである教師は、多角的な視点に基づき理論的な成果を咀嚼し、指導法の向上を目指さなければならないのである。

その時代その時代に流行した理論に単純に影響を受け、振り子のように右に左に大きく揺れ動いてきた日本の英語教育に、本書が多少なりともお役に立つことがあれば幸いである。

(うしろ・ゆうじ 現代語・現代文化学系助教授)

徳田 克己

「盲導犬に関する社会的認識と福祉教育プログラム」
徳田克己、望月珠美著（障害理解研究会出版部
1998） [中央図：369.27-To35]



最近では、幼稚園児でさえも盲導犬や車いす、白い杖、手話などの存在を知っている。このように、障害や福祉の情報が世の中に広く知られるようになったことは、「障害理解」を専門としている私たちからするとたいへん嬉しいことである。しかし正しい認識が広まるとともに、その副産物として、さまざまに色づけされた誤解も広がってしまう。

例えば、「盲導犬は信号の色を見分けることができる」、「盲導犬に行き先を告げるだけで、目の不自由な人をそこまで連れて行ってくれる」、「盲導犬は主人に危険が迫ると吠えて知らせる」と思っている人は多く、また「仕事中に盲導犬の頭をなでたり、エサをあげてはいけない」ことを知っている人は少ない。世の中の人を知っておいてくれないければ、盲導犬を使用している視覚障害者が危険な目にあうことさえある。

本書では、幼稚園児から成人までを対象とした盲導犬に関する社会的認識調査の結果を紹介し、学校教育において扱うことのできる盲導犬に関する福祉教育プログラムの例を示した。いくつかの小・中学校において、このプログラムが適用されたという報告を受けている。

盲導犬とその使用者に関する正しい認識が広まり、社会的な受け入れがさらに進むことを願っている。調査に協力して下さった盲女性の「盲導犬を得てから、以前に比べて気軽に町へ出かけることができるようになりました。でも、もっともっといろいろなところへ行ってみたいのです。」という言葉を忘れないで、啓発を続けていきたい。

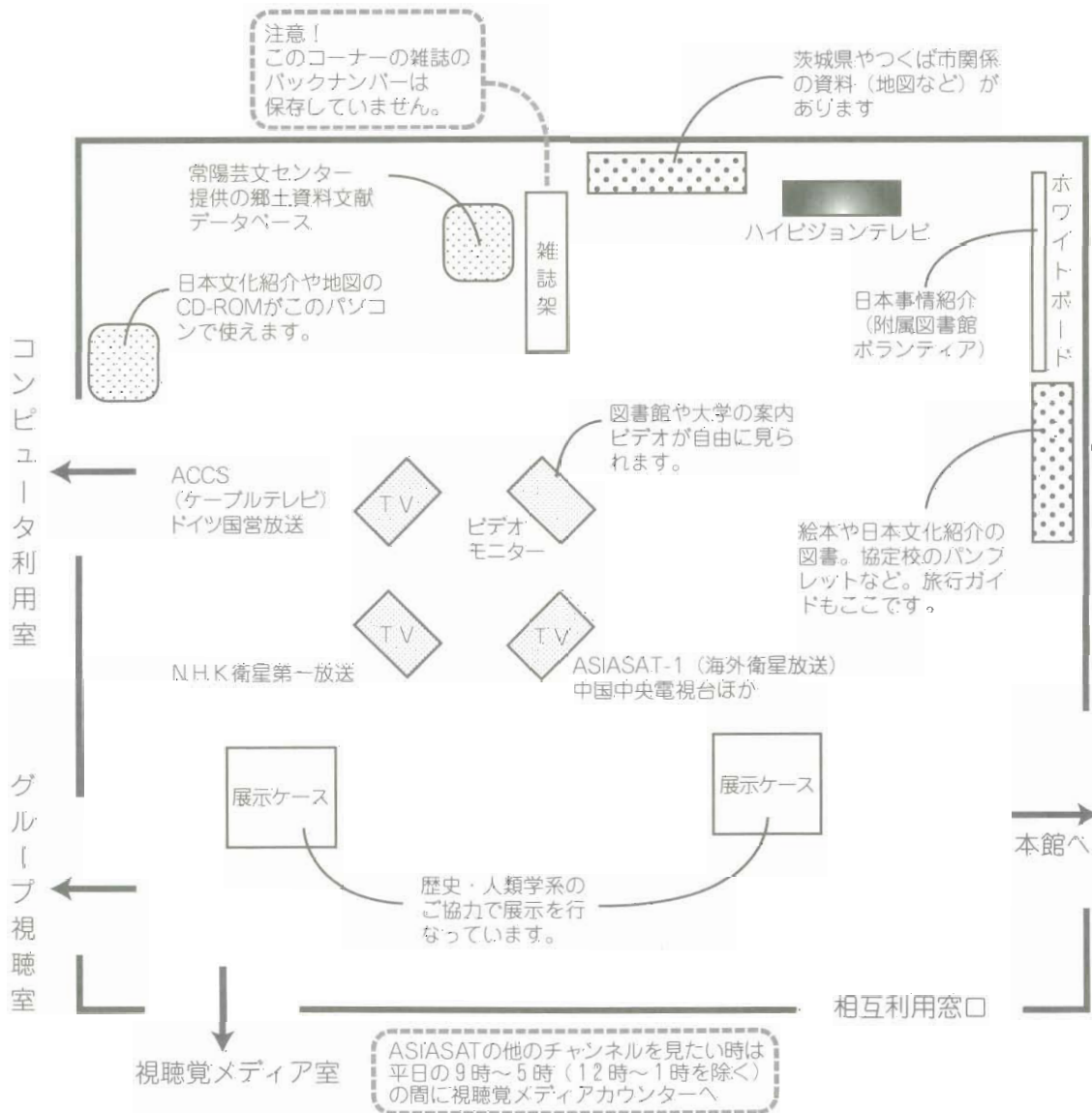
(とくだ・かつみ 心身障害学系講師)



国際交流コーナー・地域情報コーナーを知っていますか？

図書館公開係

中央図書館の入館ゲートからまっすぐ進んでつきあたり、新館2階のソファや観葉植物がたくさんある明るいコーナーが国際交流コーナー・地域情報コーナーです。このコーナーはその名のとおり、日本文化や生活情報、外国の大学案内や最新の映像、そして茨城県やつくば市といった地域の情報を提供するために設けられています。(昼寝スペースではありません!)。地域情報誌やガイドブック、また映像やCD-ROMなどいろいろな形の情報が一箇所に集まっています。ぜひ、活用してください。





ASK US としょかんミニガイド

図書館における防災

11月30日(月)、利用者の方にも多数参加していただき、図書館の防災訓練が行われました。



消防署員の指導をうけながらの消火訓練

Q：この訓練はどんな想定で行われたのですか？

A：午後2時頃、関東地域直下でマグニチュード7、震度6の地震が発生し、中央図書館2階の事務室内から火災が発生したというものです。

Q：地震と火災だったのですね。

つくばは地震の多いところでちょっとした震度3くらいの地震なら慣れています。が、震度6のレベルになると、図書館ではどうなるのでしょうか？

A：当たり前のようですが、

- ①書架から資料が落下し、散乱する。
- ②書架が倒れる、ねじれる。
- ③家具類が倒れる、コンピュータ等が落ちる。
- ④蛍光灯等が落下したり、ガラスが割れる。等ということが起こります。

記憶に新しい大地震として、1995年1月の兵庫県南部地震があります。このときの神戸大学附属図書館での被災状況が、インターネット上で公開されています。被災直後の写真は、当時の様子を生々しく伝えています。

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/>

Q：資料の落下を防ぐことはできないのでしょうか？

A：書架から資料の落下を防ぐには、棚に扉を付けることが考えられます。しかし、資料を利用する時にはかえって邪魔になってしまうため、扉を付けている図書館は殆どありません。

また、棚板が奥へ向かって傾斜している書架も有効だそうですが、本学図書館には残念ながらありません。

Q：書架の倒壊に対しては、何か対策がされているのでしょうか？

A：一番安全なのは、壁際に据えつけて固定した書架ですが、そのように書架を置けるスペースは限られています。それ以外の書架は、平行して並んだ書架の頭部を幾つも連結して、大きな幅広い書架のようにすることで補強し、揺れや倒壊を防いでいます。また、書架をボルトで床に固定する工事も行なっています。が、これだけではまだまだ十分とは言えないかもしれません。

Q：他の設備はどうでしょうか？

A：図書館のエレベータは、震度3程度以上の地震が起きると最寄りの階に自動的に停まるようになっています。中に閉じ込められてしまったときは、直ぐに職員が確認しに行きますので、落ちついてお待ちください。また、確認が遅れているという場合は、内部の非常電話を使って連絡してください。

Q：火災に対する設備はどのようなのでしょうか？

A：まず防火シャッター・防火扉が閉じるようになっています。

消火設備としては、館内の各所に消火栓があります。が、スプリンクラーはありません。他に特殊なものとして、貴重書庫に二酸化炭素による消火設備があります。

Q：本学図書館で実際に避難するときはどのようにするのでしょうか？

A：災害が起きたら、まず非常ベルや緊急放送等で状況をお伝えします（停電にも備えて、拡声

器もカウンターに常備しています)。続いて、すぐに図書館職員が数名ずつ各階に誘導にいきます。職員の誘導に従って避難してください。

普段使っている出入口・階段や通路はほぼ1か所に集中しており、そこへ殺到すると混乱のもとになってしまいます。その経路以外にも、各階に何箇所か非常口があります。



新館東側の非常口

通常は出入りすることができない場所が多いので、知らない人が多いと思いますが、万が一に備えて、一度確認しておいてください。(但し、非常口を無理に開けようとする、防犯ベルが鳴ります!)

それ以外に災害発生時に図書館が気掛かりな点としては、

- ①学外からの利用者が多く、図書館内の配置に不案内な人が多いこと
- ②身体の不自由な利用者の避難の介助
- ③特に中央図書館では各階の面積が広いわりに職員数が少なく、十分な避難の誘導・介助ができるかどうかということ
- ④時間外開館時(土日祝日、午後5時から10時まで)に被災した時の利用者の安全確保と避難誘導

等が挙げられます。

利用者の方々のご協力をお願いいたします。

本学教官寄贈著書紹介

平成10年8月～11月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介します。(敬称略、寄贈者五十音順、所属は平成10年度のものです。)

安仁屋政武(地球科学系) パタゴニア: 氷河・氷河地形・旅・町・人. 古今書院, 1998

池田裕(歴史・人類学系) Comic edition 聖書. 講談社, 1984 [編訳書]

石部元雄(名誉教授) 障害学入門 / 柳本雄次(心身障害学系) 共著. 福村出版, 1998

卯城祐司(現代語・現代文化学系) 第二言語習得の研究. 大修館書店, 1998 [翻訳書]

岡部克己(心身障害学系) Educational rehabilitation and nursing for aphasics in Japan. Univeresity of Tsukuba and Tokyo Metropolitan University of Health Sciences, 1998

五十殿利治(芸術学系) The eastern dada orbit: Russia, Georgia, Ukraina, Central Europe, and

Japan. G.K.Hall & Co., 1998 (Crisis and the arts ; the history of dada 4)

加藤慶二(現代語・現代文化学系) ギュンター・クリンゲ作品集. 第1巻, 第2巻, 永田書房, 1998

小西甚一(名誉教授) 日本文藝の詩学: 分析批評の試みとして. みすず書房, 1998

駒井洋(社会科学系) 新来・定住外国人資料集成. 上巻, 下巻. 明石書店, 1998

高橋伸夫, 手塚章(地球科学系) フランス文化と風景. 東洋書林, 1998 [翻訳書]

竹宮隆(名誉教授) 私の海ゆかば. [竹宮隆], 1998

田島裕(社会科学系) Commercial law in a global context: some perspective in Anglo-Japanese law. Kluwer Law International, 1998

徳田克己(心身障害学系) 盲導犬に関する社会的認識と福祉教育プログラム. 障害理解研究会出版部, 1998

中田英雄 (心身障害学系) 大学生のための研究論文のまとめ方. 文化書房博文社, 1998
 野村港二 (農林学系) 植物細胞工学入門. 学会出版センター, 1998
 樋口貞三 (名誉教授) 身体の飢餓と魂の飢餓: 筑駒校長としての 1461 日. 筑波書房, 1998
 平不二夫 (名誉教授) 手の復権: みずみずしい感覚を育む. 筑波出版会, 1998
 黄順姫 (社会科学系) 日本のエリート高校. 世界思想社, 1998
 古澤邦夫 (化学系) Electrical phenomena at inter-

faces: fundamentals, measurements, and applications. M.Dekker, 1998 (Surfactant science series 76)

古田博司 (社会科学系) 東アジアの思想風景. 岩波書店, 1998

谷田貝豊彦 (物理工学系) 光情報処理の基礎. 丸善, 1998

吉田武男 (教育学系) 教職教養のための同和教育の基礎. 協同出版, 1997 (教職課程新書); シュタイナー教育を学びたい人のために基礎編. 協同出版, 1998



〔全国〕

国立大学図書館協議会理事会 (平成 10 年度第 3 回)
 11 月 6 日 (金) 東北大学附属図書館において開催されました。

〔報告事項〕○事業計画の実施状況について○要望書の提出について○国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会報告○国立大学図書館協議会海外派遣者選考委員会報告○著作権特別委員会報告○国際情報アクセス特別委員会報告○図書館電子化システム特別委員会報告○情報資源共用・保存特別委員会報告○図書館組織・機構特別委員会報告○各地区協議会報告○国公立大学図書館協力委員会報告, ほか

〔協議事項〕○総会の運営について○第 45 回総会の理事会付託事項について○図書館における規制緩和について○国際 ILL ラウンドテーブルについて○第 46 回総会について, ほか

第 31 回関東地区国立大学図書館協議会事務 (部・課) 長会議

11 月 27 日 (金) 横浜国立大学の当番で開催されました。

〔協議事項〕○高額・稀用データベース等の契約についてのコンソーシアム方式の導入について○コンソーシアムの可能性について○現職者研修の在り方について○図書館サービス高度化に伴う実

務情報の交換促進について○大学図書館における情報リテラシー教育支援への取り組みについて, ほか
 〔県内〕

平成 10 年度茨城県図書館協会大学等図書館職員研修会開催

12 月 8 日 (火) 中央図書館集会室において, 図書館部職員研究会に引き続き, 「電子図書館への取り組みとその展望—図書館情報の発信と図書館協力」というテーマで開催されました。

はじめに, 図書館情報大学助教授杵本重雄氏に「電子図書館 (Digital Library) の現状と今後の展望」というテーマで, デジタル図書館について基本から問題点まで, わかりやすく講演していただきました。次に, 事前のアンケート調査に沿って討議を行い, 意見交換をしました。県内の大学図書館, 公共図書館の職員及び本学の図書館職員併せて 70 名を越える参加がありました。

〔学内〕

第 212 回附属図書館運営委員会 (9 月開催)

〔審議事項〕○平成 11 年度の雑誌の購入について○平成 12 年度以降共同利用雑誌の購入方針について, ほか

〔報告事項〕○研究図書委員会 (第 25 回) について○電子図書館専門委員会 (第 2 回) について○医学図書館委員会 (第 23 回) について○平成 10 年

度研究用人文・社会系基本図書購入について○図書館専用電算機の更新について○筑波大学開学 25 周年記念教育学系・附属図書館共催特別展「近代教育学の源流～コメニウスからフレーベルまで～」について、ほか

第 213 回附属図書館運営委員会（11 月開催）

〔審議事項〕○附属図書館長候補者の選考に係る意見書について○平成 12 年度概算要求について、ほか

〔報告事項〕○蔵書構成専門委員会（第 49 回及び第 50 回）について○国立大学図書館協議会理事会（平成 10 年度第 3 回）について○旧東京教育大学

蔵書の目録遡及入力（平成 11 年度科研費）について○筑波大学開学 25 周年記念教育学系・附属図書館共催特別展「近代教育学の源流～コメニウスからフレーベルまで～」について、ほか
平成 10 年度図書館部職員研修会開催

12 月 8 日（火）中央図書館集会室において開催されました。

大阪大学附属図書館情報サービス課参考調査掛長大西直樹氏に「カリフォルニア・デジタル・ライブラリー」というテーマで、カリフォルニア大学を中心とした、アメリカの電子図書館の現況について講演していただきました。



掲示板

雑誌記事索引、Current Contents/MEDLINE

検索ソフト変更のお知らせ

かねてからご利用いただいていた雑誌記事索引、Current Contents/MEDLINE ですが、近々検索ソフトが変わります。雑誌記事索引は図書館のホームページから検索が可能になり、Current Contents/MEDLINE 同様、WWW 版 OPAC とリンクする予定です。Current Contents/MEDLINE は ERL という検索ソフトに変更になるため画面が少し変わりますが、データの内容は同じです。ご意見・ご質問等ございましたら、各図書館レファレンス・デスクまでご連絡ください。

